あみゆめカフェ
～知って、好きになって、発信する　未来に繋げるカフェづくり～

課外活動

地域交流

代表者：農学部資源生物科学科　２年　中原　沙彩
農学部地域環境科学科　２年　小貫えみり

連携先

阿見町役場

顧問教員

福与　徳文（農学部・教授）

参加者

阿蘇　日和（農学部資源生物科学科　２年）
小貫えみり（農学部地域環境科学科　２年）
加来　萌菜（農学部資源生物科学科　２年）
河添　　京（農学部資源生物科学科　２年）
黒坂　愛美（農学部資源生物科学科　２年）
鈴木　美果（農学部生物生産科学科　２年）
高木明香莉（農学部資源生物科学科　２年）
田口真秀子（農学部資源生物科学科　２年）
中原　沙彩（農学部資源生物科学科　２年）
滑川　晶子（農学部資源生物科学科　２年）
細川　　寛（農学部資源生物科学科　２年）
前田　衣美（農学部資源生物科学科　２年）
丸田　敬子（農学部資源生物科学科　２年）
山田　尚主（農学部資源生物科学科　２年）

プロジェクトの概要

●活動背景

水戸で生活していた大学一年生のとき、阿見について周りの人に尋ねると、「アウトレットはあるよね」「広い農場はあるらしい」などの返答は返ってくるが、あまり詳しいことが分からなかった。農学部のキャンパスがあり、学生がいるにもかかわらず、阿見町の情報を耳にすることが少ないため、もっと町の情報発信が必要だと感じた。また、地域について考える授業「茨城学」からも影響を受け、自分たちも積極的に町について知り、行動を起こすことが必要だと考えた。さらに、自分たちの食への興味も後押しし、「阿見を知って、好きになって、発信する」のコンセプトのもと、阿見の農産物を使った料理を提供するカフェイベントを企画するに至った。

●活動目的

学生と町民との交流の場を作り、町についての情報交換を活発化させ、さまざまな人に阿見町について知ってもらうことを目的としている。

●イベントの内容

町の公共施設において、町民と学生をターゲットとしたカフェイベントを開いた。カフェでは阿見町の農産物を使用した軽食やスイーツを販売した。また、メニューの考案、調理は自ら行った。お客様に対しては、阿見町や、茨城大学農学部の地域と関わる団体についての情報発信を行った。

カフェ当日の様子

7月カフェ後の集合写真

以下の日程でカフェイベントを開催した。また、形式は異なるが、農学部の学園祭である鍬耕祭においても町の情報発信を意識した出店を行った。

第１回　７月23日(土)
鍬耕祭　10月29日(土)・30日(日)
第２回　11月26日(土)・27日(日)

①メニューの紹介

土浦保健所の指導のもと、町の旬の食材を使用するメニューを考案した。

７月カフェ

場　所　本郷ふれあいセンター１階ロビー
来客数　51人

メニュー

＊ラタトゥイユ
＊枝豆パウンドケーキ
＊かぼちゃパウンドケーキ

ラタトゥイユは、野菜以外には塩とオリーブオイルのみを使用し、素材の味を生かした調理をした。パウンドケーキは、かぼちゃの量を多くしたり、枝豆を粗くつぶしたり等、風味と食感を残すために工夫をした。

鍬耕祭

メニュー

＊かぼちゃワッフル
＊さつまいもワッフル

バターナッツカボチャの水分の多い点を生かしたモチモチ触感のワッフルと、黒ゴマでサツマイモ本来の甘さを引き立てたしっとりしたワッフルに仕上げた。

11月カフェ

場　所　本郷ふれあいセンター１階ロビー
来客数　１日目：39人
　　２日目：24人

メニュー

＊人参ポタージュ
＊ゆずマフィン
＊サツマイモクッキー
＊ゆず紅茶

〈11月カフェのメニュー表〉

阿見町内には自宅の庭にゆずの木を持つ農家が多く、旬の時期には直売所等にも多く出回る。お客様から特に好評だったのがゆずマフィンだ。アクセントのゆずピールも手作りであり、レシピについて知りたいという声も多く頂いた。

ゆずマフィン

～お客様の感想の一部～

“かぼちゃのケーキが美味しかったです。外サクサク中しっとりで、とても美味しかったです。”

“ゆずマフィン、盛り付けもきれいでとても美味しかったです！　上に載っていたゆずがよかったです。ゆず紅茶は思ってたよりゆずの味がして美味しかった！　個人的には酸味があってとても好き。”

②お客様との交流ツールの紹介

カフェ開催時には、地域の方と私たち学生が交流するためのツールとして、以下のようなものを用意した。

・「クロスワードパズル」：阿見町の魅力や、地域で活動する農学部の団体について、解きながら知ってもらった。
・「阿見のいいとこマップ」：阿見町の形をした大きな模造紙に、町のいいところを書き入れてもらうことで町のよさが見える形になった。例えば、“適度に田舎なところ”、“空が広いところ”、“霞ケ浦のサイクリングロード（つくば霞ケ浦りんりんロード）と稲田と蓮根田の景観”、“林が多く夏でも涼しい。ウグイスやカエル、ウサギなどとも出会える！自然を楽しめる良いまち”などのコメントが書かれた。
・「阿見の隠れた魅力発見キャロット」：阿見町内の魅力あるスポットについて取り上げ、訪れたことのない場所にシールを貼ってもらうことで、その場所に興味を持ってもおうと考えた。

これらのツールを話のきっかけとして、町民の方々から町や茨城大学に対する率直な考えを聞くことができた。“大学生は町と連携してPR活動を行ってほしい”、“大学が何をしているのか興味がある”などの声を頂いた。

阿見のいいとこマップ

③イベントの宣伝について

次のような手段で宣伝を行った。

・チラシの掲示（大学内、あみプレミアム・アウトレットなど）
・会場近くのショッピングセンターでのチラシの配布
・町の広報誌「広報あみ」への掲載
・ラジオでの宣伝（牛久コミュニティーFM）
・SNS（ツイッターやホームページ）

7月カフェのチラシ

阿見観光協会のブログでの紹介

④お客様からの声（アンケートから抜粋）

“クオリティー高い！オイシイ！掲示物も工夫されていて面白い。お客さんと店員さんのキョリが近くてステキです”

（20代　女性）

“発見キャロット、面白かったです。どんな結果が出るか気になりました。”

（20代　女性）

“‘食’は健康の源なので、学んでいることをどんどん発信してください。応援しています。”

（40代　女性）

“学生の方とお話しできてよかったです”

（60代　女性）

プロジェクトの成果報告

活動を行う中で、地域の方々と関わり、町についての情報を得られた。阿見町役場からは、観光パンフレットからの情報をはじめ、様々な情報を得られた。カフェのお客様には、自分たちが調べた町の情報を発信できた。また、町の農家とのつながりを持ったことで、町の農産物について自分たちが知ることができたことに加え、お客様にも知ってもらうことができた。

成果①　役場との協力による情報発信

地域への影響力の大きい役場と協力できたことは、情報源、情報発信源として大きな成果であると考えている。阿見での活動を始めるにあたり、アドバイスをいただきに阿見町役場を訪問したことがきっかけで、阿見町役場の農業振興課・商工観光課の職員の方々と繋がりを作ることが出来た。広報あみお知らせ版には、11月カフェの開催について掲載していただいた。 夏季休業中には、阿見町の教育長との対談も行い、活動の報告と、地域交流についての意見交換をし、激励していただいた。カフェ当日の様子については、あみ観光協会が運営するブログ「あみブロ」で紹介していただいた。

成果②　町外の人への情報発信

第二回目のカフェが、町外、県外からも参加者が訪れるアームレスリング大会と同日同会場での開催となり、様々な人に町についてアピールできた。会場確保の段階では開催が危ぶまれたが、商工観光課の方々の協力のもと無事開催まで漕ぎつけた。

●反省と今後の展望

①　阿見町について多くの人に知ってもらうという目標に対して

カフェでの掲示やお客様との会話での交流により、阿見町の観光スポットや農産物、また茨城大学生の活動についても紹介すること

ができ、お客様への情報発信はできたと感じている。一方反省として、交流で私たちが得た情報を、さらに調べて発信することが不十分だったと感じている。今後の活動では、聞いた話をメンバーで共有し、さらに、実際に耳にした町の行事へ参加するなどして情報を深め、発信したい。

② 活動計画について

イベントの回数は、計画より少ない２回となった。イベントを一回開催するための過程が予想していたよりも膨大であったことが大きな理由である。来年からも活動を継続させていくためには、毎回全てのレシピを変えるのではなく、定番のメニューを用意して旬に合わせて使用する野菜を変化させるなどの工夫をする必要があると考えている。

③ 活動場所について

計画では活動の後半を町外で行い町の情報発信に力を入れる予定であったが、全て町内での開催となった。場所を探す都合上、町内での開催がスムーズであったことが主な理由であった。しかし、お客様からは学生や大学に対して距離を感じているような声も聞かれたため、町の情報発信だけでなく、大学と地域の橋渡しのような役割を担うことも必要だと感じた。今後、あみゆめカフェが学生と地域の方々が関わる恒例のイベントとなり、交流を活発化する存在となることが望まれる。

●活動を通しての感想

このプロジェクトを始めるきっかけとなったのは、地域と関わりたいという思いに加え、自分たちで一から何かを始めたいという気持ちであった。「あみゆめ」という名前の由来も、阿見で皆の夢を叶えたいというところからきている。いざ活動を始めてみると、週に一回行っていた会議の進め方やメンバーの役割分担、また関わりを持った方々との連絡など、プロジェクトの内容以前に考えさせられることも多かった。しかし、分からないことが多い分、先輩方や先生方をはじめ多くの方々の助けをいただき、多くの学びを得た。このような挑戦ができる環境には本当に感謝しており、活動ができてよかったと感じている。